時間的展望を媒介とした青年期における自己肯定感が精神的健康に及ぼす影響

―親の受容的な養育態度および仲間からの被受容感に焦点をあてて―

姜　信善[1]・砂川　愛奈[2]

The effect of self-affirmation in adolescence on mental health through a temporal perspectives：Focus on parents' receptive upbringing attitudes and peer acceptance

Sinsun KANG and Mana SUNAGAWA

[摘要]

本研究の目的は，児童期及び青年期の親の養育態度および仲間経験が自己肯定感や時間的展望にどのように関連しており，またそれらが精神的健康にどのような影響を及ぼすのかについて検討を行うことであった。まず，児童期と青年期の両時期ともに着目した親の養育態度と自己肯定感，時間的展望との関連について明らかにするため，大学生48名を対象に予備調査を行った結果，青年期においては親の養育態度と自己肯定感，自己肯定感と時間的展望との間にそれぞれ関連があることが示唆されたが，児童期においては有意な結果が得られなかった。次に，予備調査の結果を踏まえ，大学生1023名を対象に本調査を行った。近年の家庭環境の多様化の影響によって，子どもが認知する養育者は多様であることが考えられた。そこで，調査対象者に主な養育者（両親，母親，父親）を思い浮かべてもらった。その結果，主な養育者として両親，母親，父親の順に多かった。その養育者として思い浮かべた養育者別に分析を行った。その結果，両親・母親のみを想起した青年期のモニタリング的な養育態度，父親のみを想起した児童期の受容的な養育態度および児童期・青年期の仲間からの被受容感によって，自分自身を前向きに捉えることができ，その自己肯定感が時間的展望に肯定的な影響を与え，それが精神的健康につながることが示された。

キーワード：養育態度・受容，仲間受容，自己肯定感，時間的展望，精神的健康

Keywords：Nurturing attitude/acceptance, peer acceptance, Self-affirmation, Temporal perspectives, Mental health

問題と目的

現代青年は皆，少なからず悩みを抱いている。例えば，友人や恋人との人間関係や家族の問題，今後の自分の将来に対してなど，人それぞれ悩みは様々である。粟谷・本間（2009）は悩みや困難を乗り越える上で極めて重要であるものとして，自己肯定感をあげている。彼らは自己肯定感を「自分は自分らしくあって良い，自分の行動や決定をそれでよいと認められる力」と定め，自己肯定感が現代青年の気持ちの根底を支えるものであると述べている。現代青年が山あり谷ありの人生を生き抜くためにも自己肯定感を持つことは必要不可欠であると考えられる。

しかし，内閣府により公表された「子ども・若者白書（令和元年版）」において，日本の若者の「自己肯定感」が諸外国の若者に比べて，低いということが指摘されている。さらに，内閣府の「我が国と諸外国の若者の意識に対する調査」（平成 25 年度）によると，将来に希望を抱く人がアメリカや韓国などの他国では 8 割以上占めているが，日本では 6 割にとどまっているという現状である。これらのことから，自己肯定感と将来に見通しを持つという未来展望の間には何らかの関連があることが考えられる。大学生の中には将来に対して，不安を抱いている人も多いだろう。その不安を持つ大学生の自己肯定感が高ければ，大学生活の中で様々なことに積極的に挑戦し，自分の向き不向きについても見つめなおし，自分の将来に対して前向きに考えられるよう

[1] 富山大学人間発達科学部

[2] 人間発達科学部令和 2 年度卒業　現石川県小学校教員

になるだろう。しかし，自己肯定感と未来展望との関連についての先行研究はほとんど見当たらない。そのため，本研究では，時間的展望の獲得期である青年期（日潟・斎藤，2007）においての自己肯定感と未来展望について検討していく。

岡村（2011）によると，家族等との別離や死別といった喪失体験はうつ症発症に大きく影響を及ぼし，このストレスが積み重なることでうつ症発症の危険性を増大させると述べている。つまり，過去の出来事を積み重ねるのではなく，その都度受け入れることができればうつ症発症を妨げられるのではないだろうか。また，先行研究においても過去･現在･未来の全てにおいて肯定的な時間的展望を持つものは精神的健康が高いことが示されていること（日潟･斎藤，2007）から，ある時点において肯定的な時間的展望を抱くことにより，精神的健康が高まると考えられる。これらのことから，青年期において自己肯定感を持つことができれば，肯定的な時間的展望を抱くことができ，さらに精神的健康にも良い影響を及ぼすことが考えられ，本研究ではこの関連について検討することとする。

では，自己肯定感はどのようなことにより高まるのだろうか。尾坂（2019）は現代青年が周りから自分自身のことを認められていると感じることで「安定的な居場所」のような関係を見つけ出し，自己肯定感を高めることが出来るのではないかと述べている。郭・田中・任・史（2018）は子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因についての実証研究を行い，自己肯定感には「経済的要因」と「関係的要因」が影響を及ぼしていることを示した。「関係的要因」には親や親戚との関係，学校での生活，友人の有無などが含まれており，親との関係が良好であること，学校が楽しく自分の居場所があること，友人がいることが子どもの自己肯定感に大きく影響していると述べている。以上のことから，子どもたちにとって，最も身近な存在である親や仲間から認められることで自己肯定感を高めることができるのではないだろうか。

親子関係と自己肯定感に関する先行研究では，親子間コミュニケーションと子どもの自己肯定感との関連についての研究が行われ，子が父母に対して開示的に自分の気持ちや考えを話せるような関係であると自己肯定感を高める，つまり，父母の受容的な態度が自己肯定感と関連していることが示されている（海老沼，2017）。また，白川（2011）は自己肯定感の対義語である自己否定感について検討し，親子関係の充実が子どもの自己否定感を和らげる効果があり，子どもは大人から目を向けられ，受容されることによって自らの存在意義を感じ取り，自己否定感を低めると述べている。これらのことから，親からの受容的な態度は子どもの自己肯定感に強い影響を及ぼすことが予想される。

友人関係と自己肯定感に関する先行研究では，学校生活で友人など家族以外の人から認められることで社会から認められていると感じることができ，自分の個性を大切にし，自分に自信を持つことができると示されている（尾坂，2019）。また，石丸・荒木（2005）は友人からの評価が高い場合，自己肯定感にプラスの影響を及ぼすことを明らかにしている。さらに，河越・岡田（2015）は大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因についての検討を行い，学校生活での人気が最も自己肯定感にプラスの影響を及ぼすことを示し，勉強や運動，特技などで友人から認められるような経験は，毎日の生活の中で伸び伸びと生きていると感じられ，充実感を覚えることに影響を及ぼしていると述べている。子どもたちは学校で過ごす時間が長く，友人とのかかわりが多くなる。そのため，友人関係が学校生活の満足感にもつながるであろう。以上より，自己肯定感を高めるためには親や友人からの受容的な態度が重要となるといえる。

これらのことから，親の養育態度および仲間経験が自己肯定感に影響し，またそれが時間的展望を媒介して精神的健康に影響を及ぼすのではないかと考えられる。

今までの先行研究（山本・上手，2017；姜・酒井，2006）では，ある発達段階においてのみの親の養育態度を検討しており，ある個人が児童期及び青年期においてどのような養育態度を受けてきたのかという連続的な視点からの検討はほとんど見当たらない。しかし，児童期は他者意識が発達し（外山・伊藤，2001）他者から認められることで自己肯定感が高まりやすいが，青年期に入ると自分らしさを模索し，独立して生きていく準備を始める（松下･吉田，2009）ことから，青年期においては子どもの行動を見守るような親の養育態度の方がより大切なのではないかと考えられる。以上より，子どもの各発達段階における親の養育態度が自己肯定感に異なった影響を及ぼすと考えられることから，本研究では個人

が受けてきた親の養育態度に関して児童期から青年期という連続的な視点から検討していく。

篠原・福山（1987）が述べているように，親の養育を受ける子ども自身がその養育態度をどのように感じ，どのように対処するかに意味があると考えられるため，親の養育態度については子ども自身の認知が重要であろう。金子・新瀬（2002）は，養育態度に関して親からされたことを子どもがどのように感じ，次の活動につなげるかが大切だと述べている。よって，養育態度については親の認知よりも子どもの認知の方が重要であると考えられるため，本研究では親の養育態度に関しては子どもの認知に焦点を当てて検討していく。

そこで本研究では，児童期から青年期の親の養育態度および仲間経験が自己肯定感にどのように関連しており，それは時間的展望にどのような影響を及ぼすのか，またその時間的展望が精神的健康にどのように関連しているのかについて検討することを全体的目的とする。そこで本研究での具体的仮説は以下の通りである。

《仮説》児童期青年期いずれにおいても親の受容的な養育態度および仲間からの被受容感が高い場合，それらが自己肯定感を高め，それにより肯定的な時間的展望を持つことができ，その影響で精神的健康の促進にもつながりやすいであろう。

なお，上記目的のための，以下の予備調査および本調査の調査実施においては，研究の趣旨を説明した上で，調査用紙への回答が自由意志によること，授業の評価に一切関係ないこと，途中辞退の自由などを教示し，同意を得られた学生を対象に，無記名による質問紙調査を行った。

予備調査

目的

児童期と青年期の両時期ともに着目した親の養育態度と自己肯定感との関連についての研究や自己肯定感と時間的展望との関連についての研究は見当たらない。そこで，本研究では親の受容的な養育態度が自己肯定感を媒介して時間的展望に及ぼす影響についての示唆を得るための検討を行うこととする。よってまず，親の受容的な養育態度，自己肯定感，時間的展望の関連を調べる。次に，親の受容的な養育態度が自己肯定感，時間的展望にどのように影響しているのかを検討していく。

方法

【対象者】

T 大学に通う大学生合計 48 名（男性 13 名，女性 35 名，平均年齢　20.5 歳，SD = 0.75）

【調査時期】

2019 年 11 月上旬～ 12 月上旬

【調査内容および測定尺度】

1. 児童期・青年期においての調査内容（親の養育態度について）

［1］児童期の認知された養育態度

児童期の養育態度については，西岡（2011）により，信頼性・妥当性が確認されている「子どもの認知による子どもに対する親のリーダーシップ行動測定尺度」を用いた。この尺度は「情緒的支持」「しつけ」「ゆるい干渉」「態度の一貫性」「自律性」の 5 つの下位尺度からなるが，ここで本研究では親の受容的な養育態度に焦点を当てたことにより，「情緒的支持」の 5 項目を抜粋し，本研究の目的に合わせて教示文を修正し用いた。項目内容を table1-1-1 に示す。5 項目の質問に対し、「よく当てはまる」「まあまあ当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の 5 件法で回答が求められた。具体的な教示は以下の通りである。

教示内容:「以下にある文章は 16 歳までの（父親・母親）の養育態度について表したものです。それぞれの文章について，覚えている通りにもっとも適当と思える番号に○をつけてください。」

［2］青年期の認知された養育態度

青年期の養育態度については内海（2013）により，信頼性・妥当性が確認されている「青年期養育尺度（PAS）」を用いた。下位尺度は「受容」「心理的統制」「モニタリング」の 3 つからなるが，本研究では親の受容的な養育態度に焦点を当てたことにより，「受容」，「モニタリング」の中から 6 項目を抜粋し，本研究の目的に合わせて教示文を修正し用いることとした。項目内容を table1-1-2 に示す。6 項目の質問に対し，「非常によく当てはまる」「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」「全く当てはまらない」の 7 件法で回答が求められた。具体的な教示は以下の通りである。

教示内容：「以下にある文章は青年期の（父親・

母親）の養育態度について表したものです。それぞれの文章について，どの程度あてはまるかを下記の７段階から一つずつ選んで，〇で囲んでください。」

２．青年期においての調査内容

［３］自己肯定感

自己肯定感については「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」「自己閉鎖性･人間不信」「自己表明･対人的積極性」「被評価意識・対人緊張」の６つの下位尺度からなる「自己肯定意識尺度」（平石 ,1990）を基に本研究の目的に合わせて教示文を修正し，10 項目を抜粋して用いられた。項目内容を table1-1-3 に示す。この 10 項目の質問に対し，「よくあてはまる」「まあまああてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の５件法で回答が求められた。具体的な教示は以下の通りである。

教示内容：「現在の自分自身にとって当てはまると思われるものを選択してください。」

［４］時間的展望

時間的展望については白井（1994）により，信頼性･妥当性が確認されている「時間的展望体験尺度」の中から本研究の目的に合わせて６項目を抜粋して用いられた。下位尺度は「目標指向性」「希望」「充実感」「過去受容」の４つからなる。項目内容を table1-1-4 に示す。6 項目の質問に対し，「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」の５件法で回答が求められた。具体的な教示は以下の通りである。

教示内容：「次の項目は，あなたが希望や充実感，過去受容をどのくらい持っているのか，お聞きするためのものです。各項目にあてはまる数字を選んで番号に〇をつけてください。」

【分析手続き】

まず，親の養育態度と自己肯定感，および時間的展望との相関関係を求める。

結果

以下相関関係においては本研究で用いられる各尺度の因子ごとの項目得点を用いたが，その項目内容及び平均と SD は table1-1-1，table1-1-2，table1-1-3，table1-1-4 に示した通りである。

Ⅰ．児童期の親の養育態度と自己肯定感および時間的展望との相関関係について

児童期の親の養育態度が青年期における自己肯定感および時間的展望とどのように関連しているかについて検討を行うため，相関関係が求められた。相関関係の分析結果を table1-2-1 に示す。

①児童期の親の養育態度と自己肯定感との相関関係について

有意な相関関係は見られなかった。

②自己肯定感と時間的展望との相関関係について

自己肯定感の「自己受容」，「自己実現的態度」および「充実感」と時間的展望の３つの下位尺度全てとの間にそれぞれ有意な正の相関が示された（自己肯定感の「充実感」と時間的展望の「目標指向性」，「過去受容」との間，自己肯定感の「自己実現的態度」と時間的展望の「過去受容」との間においてのみ $p<.05$, それ以外は $p<.01$）。

また，自己肯定感の「自己閉鎖性」と時間的展望の「充実感」および「過去受容」との間には有意な負の相関関係が見られた（順に $p<.05$，$p<.01$）

Ⅱ．青年期の親の養育態度と自己肯定感および時間的展望との相関関係について

青年期の親の養育態度が青年期における自己肯定感および時間的展望とどのように関連しているかについて検討を行うため，相関関係が求められた。相関関係の分析結果を table1-2-2 に示す。

①青年期の親の養育態度と自己肯定感との相関関係について

青年期の親の養育態度「受容」と自己肯定感の「充実感」および「自己表明」との間にそれぞれ有意な正の相関が示された（いずれも $p<.05$）。また，自己肯定感の「自己閉鎖性」との間には，有意な負の相関が示された。（$p<.01$）

②自己肯定感と時間的展望との相関関係について

自己肯定感及び時間的展望は青年期について調べられたものであることから（Ⅰ．②）と同様のものである。

考察

青年期の自己肯定感は，児童期の親の養育態度との間では相関関係が示されなかったが，青年期の親の養育態度とは相関関係が示された。また，自己肯定感と時間的展望の間にも相関関係が示された。

以上のことから，青年期の親の養育態度と自己肯定感との間に正の関連が，またその自己肯定感と時間的展望との間に正の関連が見られた。

table1-1-1　児童期の親の養育態度「情緒的支持」についての項目内容(N=32)

	No.	「子どもの認知による子どもに対する親のリーダーシップ行動測定」尺度項目	平均	SD
F1 情緒的支持	1	あなたの親は、しかる時、あなたの気持ちを考えてくれていたと思いますか。	3.66	1.08
	3	あなたの親は、あなたに、「大好き」「心配したよ」などと声をかけてくれましたか。	3.53	1.25
	4	あなたが問題にぶつかったとき、どうすればよいかを一緒に考えてくれましたか。	3.84	1.23
	8	あなたの親は、あなたを甘えさせてくれますか。	3.66	1.13
	10	あなた親は、あなたが病気のときなどにやさしく看病してくれましたか。	4.22	0.93

出典：西岡敦子(2011)．子どもの認知による子どもに対する親のリーダーシップ行動測定尺度の作成　国際研究論叢　p119-128

table1-1-2　青年期の親の養育態度「受容」「モニタリング」についての項目内容(N=32)

	No.	「青年期養育尺度(PAS)」項目	平均	SD
F1 受容	1	私のことに十分気を配っている。	3.91	0.98
	4	私が悲しんでいるときには、元気づけてくれる。	3.75	1.06
	7	親の人生にとって私が大切だという感じをうける。	3.78	1.02
F3 モニタリング	8	私を本当に愛していることを態度で表そうとする。	3.06	0.97
	5	私の興味や日常の活動について知っている。	3.28	1.18
	10	ふだんの活動について私と話し合う。	3.34	1.08

出典：内海緒香(2013)．青年期養育尺度(PAS)の作成　心理学研究　第84巻　第3号　p238-246

table1-1-3　自己肯定感についての項目内容(N=32)

	No.	「自己肯定意識」尺度項目	平均	SD
自己受容	1	自分の個性を素直に受け入れている。	3.91	1.07
自己実現的態度	5	前向きの姿勢で物事に取り組んでいる。	3.19	1.04
	9	張り合いがあり、やる気が出ている。	2.94	1.06
充実感	2	生活がすごく楽しいと感じる。	3.41	1.14
	10	自分は伸び伸びと生きていると感じる。	3.44	1.30
自己閉鎖性	6	他人との間に壁を作っている。	2.97	1.10
自己表明	7	人前でもありのままの自分を出せる。	2.84	1.03
	4	人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことが出来る。	2.97	1.07
被評価意識	3	人に対して自分のイメージが悪くしないかと恐れている。	3.50	1.17
	8	人から何か言われないか、変な目で見られないかと気にしている。	3.72	1.04

出典：平石賢二(1990)．青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅰ)―自己肯定性次元と自己安定性次元の検討 p217－234

table1-1-4　時間的展望についての項目内容(N=32)

	No.	「時間的展望体験」尺度項目	平均	SD
F1 充実感	2	毎日がなんとなく過ぎていく。	3.84	0.91
	6	毎日が同じことのくり返しで退屈だ。	2.81	1.04
F2 目標指向性	1	私にはだいたいの将来計画がある。	3.25	1.06
	4	将来のためを考えて今から準備していることがある。	3.22	0.99
F3 過去受容	3	私の過去はつらいことばかりだった。	2.74	1.01
	5	私は自分の過去を受け入れることが出来る。	3.66	1.05

出典：白井利明(1994)．時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究　第65巻　第1号　p54-60

table1-2-1　児童期の親の受容的な養育態度、自己肯定感および時間的展望因子得点の相関関係(N＝32)

				自己肯定感						時間的展望		
										F1	F2	F3
				自己受容	自己実現的態度	充実感	自己閉鎖性	自己表明	被評価意識	充実感	目標指向性	過去受容
児童期	養育態度	F1	情緒的支持	.103	.085	.302	-.066	.163	.200	.233	-.045	-.249
青年期	自己肯定感		自己受容	1	.653**	.818**	-.346	.369*	-.049	.514**	.450**	.482**
			自己実現的態度		1	.674**	-.304	.473**	-.135	.492**	.632**	.428*
			充実感			1	-.363*	.409*	-.165	.592**	.410*	.445*
			自己閉鎖性				1	-.418*	.160	-.437*	-.191	-.451**
			自己表明					1	-.557**	.276	-.012	.301
			被評価意識						1	.006	.154	-.261
	時間的展望	F1	充実感							1	.331	.421*
		F2	目標指向性								1	.237

**p<.01,*p<.05

table1-2-2　青年期の親の受容的な養育態度、自己肯定感および時間的展望因子得点の相関関係(N=32)

				青年期の親の養育態度		自己肯定感						時間的展望		
				F1	F3							F1	F2	F3
				受容	モニタリング	自己受容	自己実現的態度	充実感	自己閉鎖性	自己表明	被評価意識	充実感	目標指向性	過去受容
青年期	養育態度	F1	受容	1	.545**	.305	.313	.375*	-.502**	.437*	.000	.267	.000	-.091
		F3	モニタリング		1	.095	.257	.283	-.217	.239	-.101	.187	.018	-.044
	自己肯定感		自己受容			1	.653**	.818**	-.346	.369*	-.049	.514**	.450**	.482**
			自己実現的態度				1	.674**	-.304	.473**	-.135	.492**	.632**	.428*
			充実感					1	-.363*	.409*	-.165	.592**	.410*	.445*
			自己閉鎖性						1	-.418*	.160	-.437*	-.191	-.451**
			自己表明							1	-.557**	.276	-.012	.301
			被評価意識								1	.006	.154	-.261
	時間的展望	F1	充実感									1	.331	.421*
		F2	目標指向性										1	.237

**p<.01,*p<.05

本調査

目的

予備調査の結果において親の養育態度（青年期）と自己肯定感との間に正の相関関係が，青年期の自己肯定感と時間的展望との間に正の相関関係が示されたことから親の養育態度（青年期）→自己肯定感→時間的展望という仮説についての示唆が得られた。そこで，親の養育態度および仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に影響を及ぼし，またそれが精神的健康に及ぼす影響について調べることを本調査での目的とする。よってまず，親の養育態度および仲間経験，自己肯定感，時間的展望，精神的健康（GHQ12）の関連を調べる。次に，親の養育態度および仲間経験が自己肯定感，時間的展望および精神的健康（GHQ12）にどのように影響しているのかを検討していく。

方法

【対象者】

平成 27 年 4 月 20 日に厚生労働省より公表された「ひとり親家庭等の現状について」によると，1988 年度から 25 年間で母子世帯は 1.5 倍, 父子世帯は 1.3 倍と増加していた。このデータからもいえるように，

近年，家庭環境が多様化していることが影響して片親が多くなっている。このことから，回答者それぞれが思い浮かべた主な「養育者」は両親，母親，父親というふうに異なることが考えられる。共働き世帯の増加や女性の社会進出など，働く女性が増えている一方で，現代に至っても子育ての多くを母親が担っているという現状がある（篠原・原崎，2004）。しかし，父親との関係に満足している子どもほど，抑うつ度が低いという研究（永井，2010）や，父親と母親で結果が異なる研究も多くみられる（Harris, 1998．田中，1993）。これらのことから，子どもが認知した主な養育者が父親か母親かによっても子どもへの影響は異なってくることが考えられるため，子どもが認知した主な養育者別に検討を行う。そこで，質問紙の各項目に回答する際に，「『養育者とのかかわり』を思い浮かべて以下の質問にお答えください。（例：父母両方／父親／母親／その他の養育者）」と教示され，回答後に思い浮かべた「養育者」について尋ねられた。そして，想起された養育者別に分析を行った。想起された養育者の内訳は以下の通りである。

Ⅰ．父親・母親を想起した対象者：T 大学に通う大学生･大学院生合計 696 名（男性 434 名, 女性 244 名, 他回答 1 名，無回答 17 名）　平均年齢 19.16 歳　SD = 1.11

Ⅱ．母親を想起した対象者：T 大学に通う大学生・大学院生合計 305 名（男性 155 名，女性 140 名，無回答　10 名）平均年齢　19.12 歳　SD=1.01

Ⅲ．父親を想起した対象者：T 大学に通う大学生・大学院生合計 22 名（男性 13 名，女性 8 名，他回答 1 名）　平均年齢　19.35 歳　SD=0.91

【調査時期】

2020 年 10 月

【調査内容および測定尺度】

１．児童期及び青年期の時期ごとの調査内容

［１］児童期の認知された養育態度

児童期の養育態度については山本・上手（2017）により，信頼性が確認されている「親の認知された養育態度尺度」を用いた。下位尺度は「受容的かかわり」「統制的かかわり」「回避的かかわり」の３つからなるが，ここでは親の受容的な養育態度に焦点を当てたことにより，「受容的かかわり」を用いることとした。「受容的かかわり」の８項目の質問に対し，「いつもそうである」「そうである」「少しそうである」「あまりそうでない」「そうでない」「全くそうでない」の６件法で回答が求められた。項目内容を table2-1-1 に示す。具体的な教示は以下の通りである。

教示内容：「小学校までの『養育者とのかかわり』を思い浮かべて以下の質問にお答えください（例：父母両方／父親／母親／その他の養育者）。次の各項目は小学校までの養育者（父親・母親・その他）の養育態度について表したものです。それぞれの項目について，あなたにどの程度あてはまるかを下記の 6 段階から一つずつ選んで，〇で囲んでください。」

［２］青年期の認知された養育態度

青年期の養育態度については内海（2013）により，信頼性・妥当性が確認されている「青年期養育尺度（PAS）」を用いた。下位尺度は「受容」「心理的統制」「モニタリング」の３つからなるが，本研究では親の受容的な養育態度に焦点を当てたことにより，「受容」，「モニタリング」の９項目を，本研究の目的に合わせて教示文を修正し用いることとした。項目内

table2-1-1　児童期の親の養育態度「受容的かかわり」についての項目内容(N=1027)

	No.	「認知された養育態度」尺度項目	平均	SD
F1 受容的かかわり	9	私の事を何よりも大切にしてくれた。	4.93	(1.03)
	2	家で私と楽しく過ごしていた。	4.91	(1.00)
	4	私が恐がっているときに安心させてくれた。	4.34	(1.14)
	12	私が喜びそうな事をいつも考えて行っていた。	3.98	(1.07)
	8	私のことに十分気を配っていた。	4.81	(1.00)
	18	自分のことは我慢しても私のためにやってくれることがよくあった。	4.64	(1.01)
	1	私の悩み事や心配事を親は理解していた。	4.21	(1.17)
	16	私たちと一緒に外出や旅行をするのが好きだった。	4.67	(1.18)

出典：山本美夏・上手由香(2017)．親の養育態度が大学生の評価懸念及び適応感に及ぼす影響の検討　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要　第16巻　p89-103

table2-1-2　青年期の親の養育態度「受容」「モニタリング」についての項目内容(N=1027)

	No.	「青年期養育態度」尺度項目内容	平均	(SD)
F1 受容	11	親の人生にとって私が大切だという感じをうける。	5.35	(1.36)
	3	私をほんとうに愛していることを態度で表そうとする。	4.41	(1.44)
	10	私が悲しんでいるときには、元気づけてくれる。	4.91	(1.43)
	14	わたしのことに十分気を配っている。	5.48	(1.16)
	4	私にたびたびほほえみかける。	4.41	(1.50)
	9	私の心が動揺しているときはしずめてくれる。	4.49	(1.43)
F3 モニタリング	2	私の興味や日常の活動について知っている。	4.92	(1.42)
	12	ふだんの活動について私と話し合う。	4.82	(1.59)
	7	私が外出するとき、行き先や誰と一緒か知っている。	4.84	(1.61)

出典：内海緒香(2013)．青年期の養育尺度(PAS)の作成心理学研究　第84巻　第3号　p238-246

table2-1-3　児童期の仲間経験「被受容感」についての項目内容(N=1027)

	No.	「被受容感・被拒絶感」尺度項目	平均	(SD)
被受容感	1	仲間は私に優しくしてくれた。	4.16	(0.88)
	3	私は仲間から受け入れられていた。	4.01	(0.92)

出典：杉山崇・坂本真士（2006）．抑うつと対人関係要因の研究－被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討－
健康心理学研究　19　p1-10

table2-1-4　青年期の仲間経験「被受容感」についての項目内容(N=1027)

	No.	「被受容感・被拒絶感」尺度項目	平均	(SD)
被受容感	2	私は仲間から大切にされている。	3.90	(0.88)
	3	私は仲間から信頼されている。	3.80	(0.88)

出典：杉山崇・坂本真士（2006）．抑うつと対人関係要因の研究－被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的
自己認知過程の検討－　健康心理学研究　19　p1-10

table2-1-5　自己肯定感についての項目内容(N=1027)

No.	「自己肯定感ver.2」尺度項目	平均	(SD)
1	私は、いくつかの長所を持っている。	2.88	(0.78)
2	私は、物事を前向きに考える方だ。	2.53	(0.91)
3	私は、時々、死んでしまった方がましだと感じる。	2.96	(1.01)
4	私は、自分のことが好きになれない。	2.50	(0.93)
5	私は、自分のことを大切に感じる。	2.89	(0.82)
6	私は、人並み程度には物事ができる。	2.97	(0.77)
7	私は、後悔ばかりしている。	2.31	(0.92)
8	私は、何をやってもうまくできない。	2.79	(0.82)

出典：田中道弘(2005)．大学生のインターネット利用と精神的健康に関する研究　埼玉学園大学紀要
人間学部篇　第5巻　p173-181

容を table2-1-2 に示す。９項目の質問に対し，「非常によく当てはまる」「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」「全く当てはまらない」の７件法で回答が求められた。具体的な教示は以下の通りである。

教示内容：「中学校から今までの「養育者とのかかわり」を思い浮かべて以下の質問にお答えください（例：父母両方 / 父親 / 母親 / その他の養育者）。以下にある項目は中学校から今までの養育者（父親・母親･その他）の養育態度について表したものです。それぞれの項目について，どの程度あてはまるかを下記の７段階から一つずつ選んで，〇で囲んでください。」

［３］仲間経験

児童期及び青年期のそれぞれの仲間経験について次のように調べられた。杉山･坂本（2006）により，信頼性・妥当性が確認されている「被受容感・被拒絶感尺度」を用いた。下位尺度は「被受容感」「被拒絶感」の２つからなるが，ここでは仲間経験の被

table2-1-6　時間的展望についての項目内容(N=1027)

	No.	「時間的展望体験」尺度項目内容	平均	(SD)
F1 充実感	7	毎日の生活が充実している。	3.46	(1.02)
	3	毎日が同じことのくり返しで退屈だ。	3.31	(1.19)
	14	今の生活に満足している。	3.24	(1.15)
	11	毎日がなんとなく過ぎていく。	2.41	(1.09)
	2	今の自分は本当の自分ではないような気がする。	3.48	(1.16)
F2 目標指向性	17	私には、だいたいの将来計画がある。	2.83	(1.18)
	8	私には、将来の目標がある。	3.25	(1.34)
	15	私の将来は漠然としていてつかみどころがない。	2.41	(1.14)
	13	将来のためを考えて今から準備していることがある。	2.90	(1.22)
	1	10年後、私はどうなってるのかよくわからない。	1.78	(0.96)
F3 過去受容	16	過去のことはあまり思い出したくない。	3.13	(1.28)
	4	私の過去はつらいことばかりだった。	3.58	(1.13)
	10	私は過去の出来事にこだわっている。	3.08	(1.24)
	18	私は、自分の過去を受け入れることができる。	3.62	(1.08)
F4 希望	9	私には未来がないような気がする。	3.66	(1.14)
	12	自分の将来は自分できりひらく自信がある。	2.89	(1.16)
	5	私の将来には、希望がもてる。	3.27	(1.11)
	6	将来のことはあまり考えたくない。	3.00	(1.27)

出典：白井利明(1994)．時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究　第65巻　第1号　p54-60

table2-1-7　精神的健康(GHQ12)についての項目内容(N=1027)

	No.	「精神的健康(GHQ12)」尺度項目	平均	(SD)
F1 うつ症傾向	1	いつもストレスを感じたことが	1.73	(0.83)
	2	自分は役に立たない人間だと考えたことは	1.49	(0.88)
	3	心配事があって、よく眠れないようなことは	1.24	(0.95)
	4	問題を解決できなくて困ったことが	1.66	(0.82)
	5	自信を失ったことは	1.82	(1.27)
	10	いつもより気が重くて、憂うつになることは	1.44	(0.91)
F2 社会活動障害	6	いつもより問題があった時に積極的に解決しようとすることが	0.95	(0.62)
	7	いつもより容易に物ごとを決めることが	1.02	(0.67)
	8	いつもより日常生活を楽しく送ることが	0.80	(0.69)
	9	一般的に見て、しあわせといつもより感じたことは	1.09	(0.76)
	11	何かをする時いつもより集中して	1.00	(0.66)
	12	いつもより自分のしていることに生きがいを感じることが	0.95	(0.71)

出典：中川泰彬・大坊郁夫(1985)．日本版GHQ精神健康調査票手引　日本文化科学社

受容感に焦点を当てたことにより，「被受容感」の項目を修正し４項目を用いることとした。各質問に対し，「当てはまる」「少し当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の５件法で回答が求められた。児童期の項目内容を table2-1-3，青年期の項目内容を　table2-1-4 に示す。児童期及び青年期のそれぞれの仲間経験について調べるため各質問項目に対して，児童期の場合は小学校までの仲間との関わりについて，青年期の場合は中学校から今までの仲間との関わりについてという教示が与えられた。具体的な教示は以下の通りである。

教示内容：「以下にある項目は，小学校までの（中学校から今までの）仲間とのかかわりについて表したものです。それぞれの項目について，どの程度あてはまるかを下記の５段階から一つずつ選んで，○で囲んでください。」

２．青年期における調査内容

［４］自己肯定感

自己肯定感については，田中（2005）により，信頼性が確認されている「自己肯定感尺度 ver.2」が用いられた。「自己肯定感尺度 ver.2」では，８項目の質問に対し,「よく当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「全く当てはまらない」の４件法で回答が求められた。項目内容を table2-1-5 に示す。具体的な教示は以下の通りである。

table2-2-1　両親の受容的な養育態度および仲間からの被受容感、自己肯定感、時間的展望および精神的健康因子得点の相関関係(N=696)

			児童期	青年期				時間的展望				精神的健康(GHQ12)	
			F1 仲間 被受容感	F1 親 受容的なかかわり	F3 親 モニタリング	F1 仲間 被受容感	自己肯定感	F1 充実感	F2 目標指向性	F3 過去受容	F4 希望	F1 うつ症傾向	F2 社会活動障害傾向
児童期	養育態度・仲間	F1 親 受容的なかかわり	.329**	.787**	.574**	.323**	.288**	.260**	.074	.310**	.207**	-.186**	-.259**
		F1 仲間 被受容感	1	.246**	.202**	.530**	.333**	.240**	.052	.330**	.229**	-.222**	-.277**
青年期		F1 親 受容		1	.636**	.276**	.283**	.278**	.108**	.269**	.213**	-.172**	-.262**
		F3 親 モニタリング			1	.227**	.234**	.226**	.127**	.223**	.227**	-.115**	-.209**
		F1 仲間 被受容感				1	.375**	.276**	.092*	.325**	.270**	-.212**	-.322**
		自己肯定感					1	.583**	.383**	.549**	.681**	-.565**	-.584**
	時間的展望	F1 充実感						1	.373**	.471**	.546**	-.189**	-.341**
		F2 目標指向性							1	.188**	.657**	-.434**	-.527**
		F3 過去受容								1	.437**	-.429**	-.355**
		F4 希望									1	-.433**	-.505**
	GHQ	F1 うつ症傾向										1	.386**

**p<.01,*p<.05

教示内容：「以下のそれぞれの項目について，今の自分にどの程度あてはまっているか，あてはまっていないか，4つの選択肢の中から最もあてはまるもの，いずれか一つを選んで○をつけてください。」

［5］時間的展望

時間的展望については白井（1994）により，信頼性・妥当性が確認されている「時間的展望体験尺度」が用いられた。下位尺度は「目標指向性」「希望」「充実感」「過去受容」の4つからなる。項目内容をtable2-1-6に示す。合計18項目の質問に対し，「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」の5件法で回答が求められた。具体的な教示は以下の通りである。

教示内容：「次の項目は，あなたが希望や充実感，過去受容をどのくらい持っているのか，お聞きするためのものです。各項目にあてはまる数字を選んで番号に○をつけてください。」

［6］精神的健康

精神的健康については中川・大坊（1985）により，高い妥当性と信頼性が確認されている日本版General Health Questionnaire 12（以下，GHQ12）が用いられた。GHQ12では，下記質問文に対し，回答例が掲示された後，12項目の質問に対し，4件法で回答が求められた。下位尺度は「うつ症傾向」「社会活動障害」の2つからなる。採点方法は4つの選択肢の左から順に0，1，2，3の重みをつけ，項目の合計得点を算出するリッカート法を採用した。項目内容をtable2-1-7に示す。具体的な教示は以下の通りである。

教示内容：「次の文をよく読んでください。この数週間の健康状態で，精神的，身体的問題があるかどうかおたずねします。次の質問を読み，最も適当と思われる答を○で囲んでください。この調査はずっと以前のことではなく，2～3週間前から現在までの状態についての調査です。全部の質問にもれなく答えてください。」

【分析手続き】

まず，親の養育態度および仲間経験，自己肯定感，時間的展望および精神的健康（GHQ12）との相関関係を求める。次に，親の養育態度および仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に及ぼすプロセスについて，またそれが精神的健康（GHQ12）に影響を及ぼすプロセスについて，共分散構造分析による検討を行う。なお，想起した養育者が父親の場合，その対象者が少なかったことから，共分散構造分析による検討を行うことができなかった。よって，重回帰分析による検討を行う。

結果

対象者が想起した養育者別に結果をまとめていく。

以下相関関係及び共分散構造分析，重回帰分析においては本研究で用いられる各尺度の因子ごとの項目得点を用いたが，その項目内容及び平均とSDはtable2-1-1，table2-1-2，table2-1-3，

table2-1-4，table2-1-5，table2-1-6，table2-1-7 に示した通りである。

１．想起した両親の養育態度および仲間経験，自己肯定感，時間的展望および精神的健康（GHQ12）の関連について

〔１〕想起した両親の養育態度および仲間経験，自己肯定感，時間的展望および精神的健康（GHQ12）の相関関係について

ここでは，養育者として父親・母親両方（両親）を想起した対象者についての結果を示す。

①両親の養育態度および仲間経験と自己肯定感との相関関係について（table2-2-1）

児童期の両親の養育態度の「受容的かかわり」および青年期の両親の養育態度の「受容」，「モニタリング」と「自己肯定感」との間にそれぞれ有意な正の相関関係が示された（すべてにおいて p<.01）。児童期青年期ともに仲間経験の「被受容感」と「自己肯定感」との間にそれぞれ有意な正の相関関係が示された（いずれにおいても p<.01）。

②自己肯定感と時間的展望との相関関係について

「自己肯定感」と時間的展望との相関関係については全てにおいて有意な正の相関関係が示された（全てにおいて p<.01）。

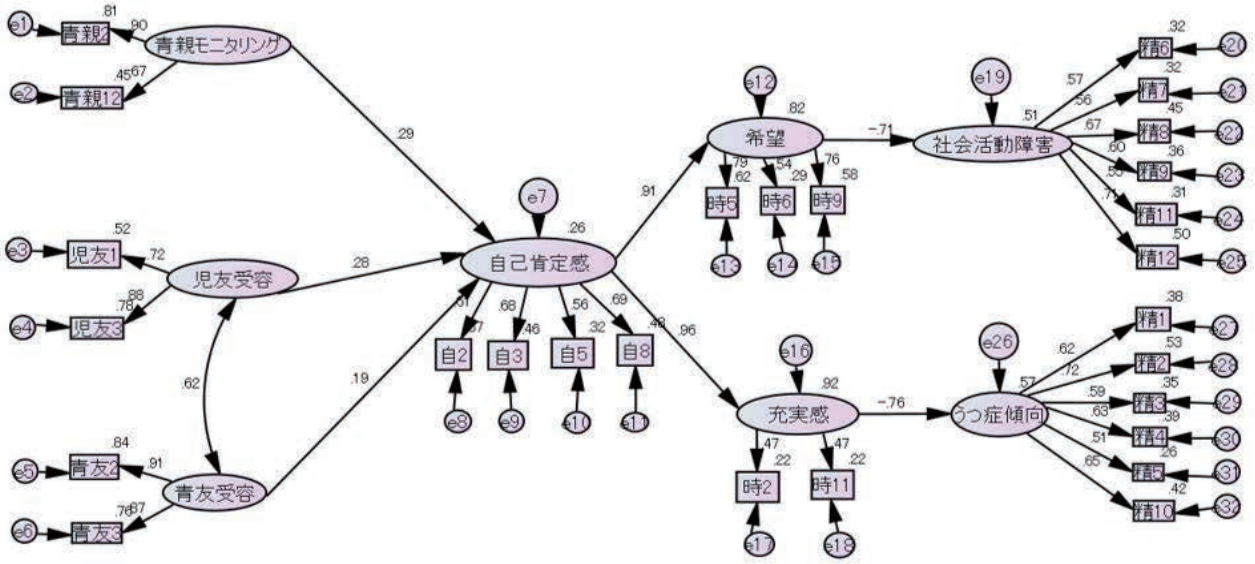
③時間的展望と精神的健康（GHQ12）との相関関係について

時間的展望と精神的健康との相関関係については全てにおいて有意な負の相関関係が示された（全てにおいて p<.01）。

〔２〕想起した両親の養育態度および仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に，またそれが精神的健康（GHQ12）に及ぼすプロセスについて

児童期および青年期においての両親の養育態度および仲間経験が青年期の自己肯定感を媒介して時間的展望に，またそれが精神的健康（GHQ12）にどのような影響を及ぼすのかについて調べるため，共分散構造分析を行った。相関関係（table2-2-1）の結果からモデルの検討を行い，モデルの適合度を調べた結果，両親の養育態度および仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に，またそれが精神的健康（GHQ12）に至るモデル（Figure1，適合度：GFI=.917，AGFI=.900，RMSEA=.048，パス係数は全て p<.001）を得ることができた。

Figure1 より，青年期の両親の養育態度の「モニタリング」および児童期青年期の仲間経験の「被受容感」それぞれが「自己肯定感」に正の影響を与えることが示された。また，「自己肯定感」が時間的展望の「希望」および「充実感」に正の影響を与えることが示され，時間的展望の「希望」が精神的健康（GHQ12）の「社会活動障害」に負の影響，時間的展望の「充実感」が精神的健康（GHQ12）の「う



※いずれのパスも有意な結果が得られている（p<.001）

Figure1．児童期・青年期においての両親からの受容的な養育態度および仲間からの被受容感→自己肯定感→時間的展望→精神的健康（GHQ12）

table2-2-2　母親の受容的な養育態度および仲間からの被受容感、自己肯定感、時間的展望および精神的健康因子得点の相関関係(N=305)

				児童期	青年期				時間的展望				精神的健康(GHQ12)	
				F1 仲間 被受容感	F1 親 受容	F3 親 モニタリング	F1 仲間 被受容感	自己肯定感	F1 充実感	F2 目標指向性	F3 過去受容	F4 希望	F1 うつ症傾向	F2 社会活動障害傾向
児童期	養育態度・仲間	F1	親 受容的なかかわり	.338**	.764**	.606**	.343**	.229**	.173**	.136*	.156**	.221**	-.090	-.191**
		F1	仲間 被受容感	1	.260**	.241**	.413**	.218**	.089	.069	.306**	.164**	-.251**	-.199**
青年期		F1	親 受容		1	.641**	.384**	.273**	.256**	.138**	.152**	.268**	-.058	-.222**
		F3	親 モニタリング			1	.322**	.264**	.171**	.086	.120*	.190**	-.105	.120*
		F1	仲間 被受容感				1	.352**	.251**	.201**	.232**	.287**	-.291**	-.373**
			自己肯定感					1	.469**	.407**	.412**	.673**	-.503**	-.461**
	時間的展望	F1	充実感						1	.371**	.296**	.536**	-.311**	-.270**
		F2	目標指向性							1	.126*	.673**	-.128*	-.448**
		F3	過去受容								1	.271**	-.344**	-.320**
		F4	希望									1	-.344**	-.443**
	GHQ	F1	うつ症傾向										1	.393**

**p<.01,*p<.05

つ症傾向」に負の影響を与えることが示された。

２．想起した母親の養育態度および仲間経験，自己肯定感，時間的展望および精神的健康（GHQ12）の関連について

〔１〕想起した母親の養育態度および仲間経験，自己肯定感，時間的展望および精神的健康（GHQ12）の相関関係について

ここでは養育者として母親を想起した対象者についての結果を示す。

①母親の養育態度および仲間経験と自己肯定感との相関関係について（table2-2-2）

児童期の母親の養育態度の「受容的かかわり」および青年期の母親の養育態度の「受容」,「モニタリング」と「自己肯定感」との間，全てにおいて有意な正の相関関係が示された（全てにおいて p<.01）。また，児童期青年期ともに仲間経験の「被受容感」と「自己肯定感」との間，全てにおいて有意な正の相関関係が示された（全てにおいて p<.01）。

②自己肯定感と時間的展望との相関関係について

「自己肯定感」と時間的展望の全ての因子においてそれぞれ有意な正の相関関係が示された（全てにおいて p<.01）。

③時間的展望と精神的健康（GHQ12）との相関関係について

時間的展望と精神的健康（GHQ12）との間には全ての因子において有意な負の相関が見られた（p<.01）が，時間的展望「目標指向性」と精神的健康（GHQ12）との間においては p<.05 で有意であった。

〔２〕想起した母親の養育態度および仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に，またそれが精神的健康（GHQ12）に及ぼすプロセスについて

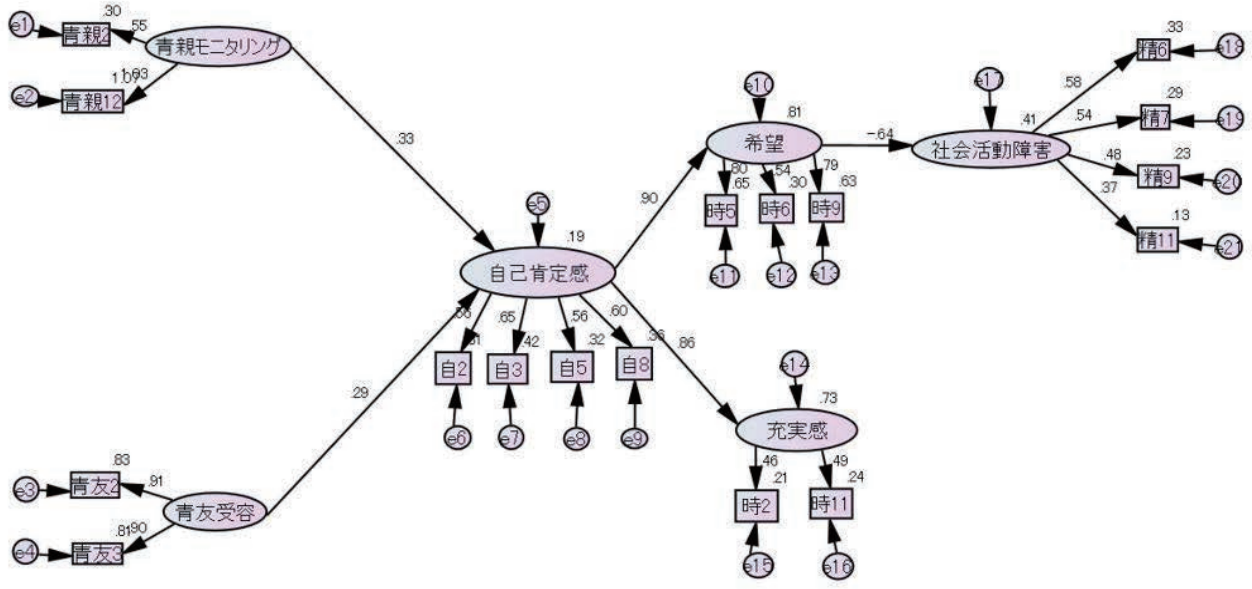
児童期青年期の母親の養育態度及び仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に，またそれが精神的健康（GHQ12）にどのような影響を及ぼすのかについて調べるため，共分散構造分析を行った。相関関係（table2-2-2）の結果からモデルの検討を行い，モデルの適合度を調べた結果，母親の養育態度および仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に，またそれが精神的健康（GHQ12）に至るモデル（Figure2，適合度：GFI=.936，AGFI=.914，RMSEA=.045，パス係数は全て p<.001）を得ることができた。

Figure2 より，青年期の母親の養育態度の「モニタリング」および青年期の仲間経験の「被受容感」それぞれが「自己肯定感」に正の影響を与えることが示された。また,「自己肯定感」が時間的展望の「希望」および「充実感」に正の影響を与えることが示され，時間的展望「希望」が精神的健康（GHQ12）の「社会活動障害」に負の影響を与えることが示された。

３．想起した父親の養育態度および仲間経験，自己肯定感，時間的展望および精神的健康（GHQ12）の関連について

〔１〕想起した父親の養育態度および仲間経験，自己肯定感，時間的展望および精神的健康（GHQ12）の相関関係について

ここでは養育者として父親を想起した対象者につ



※いずれのパスも有意な結果が得られている(p<.001)

Figure2　児童期・青年期の母親の受容的な養育態度および仲間からの被受容感→自己肯定感→時間的展望→精神的健康(GHQ12)

いての結果を示す。

①父親の養育態度および仲間経験と自己肯定感との相関関係について（table2-2-3）

児童期の父親の養育態度の「受容的かかわり」および青年期の父親の養育態度の「受容」,「モニタリング」と「自己肯定感」との間にそれぞれ有意な正の相関関係が示された（「モニタリング」において p<.05，それ以外の有意な相関関係は全て p<.01）。また, 児童期青年期の仲間経験の「被受容感」と「自己肯定感」との間にもそれぞれ有意な正の相関関係が示された（順に p<.05，p<.01）。

②自己肯定感と時間的展望との相関関係について

「自己肯定感」と時間的展望の全ての因子においてそれぞれ有意な正の相関関係が示された（「充実感」においては p<.05，それ以外は全て p<.01）。

③時間的展望と精神的健康（GHQ12）との相関関係について

時間的展望の「過去受容」と精神的健康（GHQ12）の「うつ症傾向」との間に p<.05 で有意な負の相関関係が示された。また，時間的展望の「充実感」および「希望」と精神的健康（GHQ12）の「社会活動障害」との間にそれぞれ有意な負の相関関係が示された（いずれも p<.01）。

table2-2-3　父親の受容的な養育態度および仲間からの被受容感、自己肯定感、時間的展望および精神的健康因子得点の相関関係(N=22)

				児童期	青年期				時間的展望				精神的健康(GHQ12)	
				F1 仲間 被受容感	F1 親 受容	F3 親 モニタリング	F1 仲間 被受容感	自己肯定感	F1 充実感	F2 目標指向性	F3 過去受容	F4 希望	F1 うつ症傾向	F2 社会活動障害傾向
児童期	養育態度・仲間	F1	親	受容的なかかわり	.070	.859**	.585**	.513*	.723**	.348	.312	.547**	.470*	-.601**	-.478*
		F1	仲間	被受容感	1	.103	-.039	.741**	.537*	.196	.386	.260	.503*	-.383	-.455*
青年期		F1	親	受容		1	.591**	.484*	.630**	.425*	.317	.495*	.378	-.465*	-.384
		F3	親	モニタリング			1	.349	.438*	.175	.301	.070	.345	-.275	-.255
		F1	仲間	被受容感				1	.779**	.387	.482*	.431*	.656**	-.601**	-.617**
				自己肯定感					1	.469*	.620**	.680**	.728**	-.642**	-.659**
	時間的展望	F1		充実感						1	.332	.333	.382	-.203	-.678**
		F2		目標指向性							1	.362	.826**	-.210	-.366
		F3		過去受容								1	.412	-.474*	-.405
		F4		希望									1	-.387	-.571**
	GHQ	F1		うつ症傾向										1	.551**

**p<.01,*p<.05

〔2〕想起した父親の養育態度および仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に，またそれが精神的健康（GHQ12）に及ぼす影響について

①児童期の父親の養育態度および仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に，またそれが精神的健康（GHQ12）に及ぼす影響について

児童期の父親の養育態度および仲間経験が自己肯定感および時間的展望を媒介して精神的健康（GHQ12）にどのような影響を及ぼすのかを重回帰分析を用いて検討した。その結果を table2-2-4 に示す。

まず，児童期の父親の養育態度および仲間経験が自己肯定感に及ぼす影響をより具体的に検討するため，「自己肯定感」の項目合計得点を基準変数とし，児童期の父親の養育態度および児童期の仲間経験の各因子項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われた。児童期の父親の養育態度「受容的かかわり」のみ有意な結果が得られ，標準偏回帰係数は，（β）=.695（t（21）=6.214，p<.001，両側検定）であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は R^2 = .781 であり，有意であった（F（7,14）=11.699，p<.001）。

次に，時間的展望の各因子項目合計得点を基準変数とし，児童期の父親の受容的な養育態度，仲間からの被受容感および「自己肯定感」の項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われた。時間的展望の「過去受容」において，「自己肯定感」のみ有意な結果が得られ，「自己肯定感」の標準偏回帰係数は，（β）=.962（t（21）=2.318，p<.05，両側検定）であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は R^2=.472 であり，有意であった（F（8,13）= 3.349，p<.05）。

さらに，精神的健康（GHQ12）の各因子項目合計得点を基準変数とし，児童期の父親の受容的な養育態度および児童期の仲間からの被受容感，自己肯定感および時間的展望の各因子項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われた。精神的健康（GHQ12）「社会活動障害」において，時間的展望「充実感」のみ有意な結果が得られ，「充実感」の偏回帰係数は，（β）=-.557（t（21）=-2.985，p<.05 両側検定）であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は R^2=.575 であり，有意であった（F（10,11）= 3.837，p<.05）。

table2-2-4　「父親の児童期の受容的な養育態度および仲間からの被受容感→自己肯定感→時間的展望→精神的健康(GHQ12)」の重回帰分析結果

			step1	step2				step3	
			自己肯定感	時間的展望				精神的健康	
				充実感	目標指向性	過去受容	希望	うつ症傾向	社会活動障害
児童期	親の養育態度	受容的かかわり	.695***	.042	.003	-.312	.309	-.618	-.026
児童期	仲間経験	被受容感	.190	.219	-.166	-.594	.112	-.082	-.598
青年期	自己肯定感			.321	.366	.962*	.118	.039	-.175
青年期	時間的展望	充実感						.006	-.557*
青年期	時間的展望	目標指向性						.126	.357
青年期	時間的展望	過去受容						-.179	-.173
青年期	時間的展望	希望						-.001	-.573
青年期	重回帰係数		.781***	.053	.608**	.472*	.547*	.236	.575*

***p<.001,**p<.01,*p<.05

table2-2-5　「父親の青年期の受容的な養育態度および仲間からの被受容感→自己肯定感→時間的展望→精神的健康(GHQ12)」の重回帰分析結果

			step1	step2				step3	
			自己肯定感	時間的展望				精神的健康	
				充実感	目標指向性	過去受容	希望	うつ症傾向	社会活動障害
青年期	親の養育態度	受容	.334	.320	.027	.208	-.050	-.083	.150
青年期	親の養育態度	モニタリング	.023	-.259	-.124	-.274	-.043	-.060	-.089
青年期	仲間経験	被受容感	.609	.333	.303	-.423	.408	-.043	.024
青年期	自己肯定感			.325	.661	.856**	.606	-.509	-.315
青年期	時間的展望	充実感						.083	-.562
青年期	時間的展望	目標指向性						.343	.371
青年期	時間的展望	過去受容						-.069	-.009
青年期	時間的展望	希望						-.084	-.341
青年期	重回帰係数		.600***	.027	.240	.463*	.430*	.136	.497*

***p<.001,**p<.01,*p<.05

②青年期の父親の養育態度および仲間経験が自己肯定感を媒介して時間的展望に，またそれが精神的健康（GHQ12）に及ぼす影響について

青年期の父親の養育態度および仲間経験が自己肯定感および時間的展望を媒介して精神的健康（GHQ12）にどのような影響を及ぼすのかを重回帰分析を用いて検討した。その結果を table2-2-5 に示す。

まず，青年期の父親の養育態度および仲間経験が自己肯定感に及ぼす影響をより具体的に検討するため，「自己肯定感」の項目合計得点を基準変数とし，児童期の父親の養育態度および児童期の仲間経験の各因子項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われたが，有意な結果が得られなかった。

次に，時間的展望の各因子項目合計得点を基準変数とし，青年期の父親の受容的な養育態度，仲間からの被受容感および「自己肯定感」の項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われた。時間的展望の「過去受容」において，「自己肯定感」のみ有意な結果が得られ，「自己肯定感」の標準偏回帰係数は，（β）=.856（t（21）=2.954，p<.01，両側検定）であった。なお，この時の回帰式全体の説明率は R^2=.463 であり，有意であった（F（6,15）= 4.012，p<.05）。

さらに，精神的健康（GHQ12）の各因子項目合計得点を基準変数とし，青年期の父親の受容的な養育態度および児童期の仲間からの被受容感，自己肯定感および時間的展望の各因子項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われたが，有意な結果が得られなかった。

考察

Ⅰ．想起した養育者（両親・母親のみ・父親のみ）の養育態度および仲間経験と自己肯定感・時間的展望・精神的健康（GHQ12）との相関関係について（table2-2-1，table2-2-2，table2-2-3 参照）

まず，養育態度及び仲間経験と自己肯定感との相関関係について見ると，児童期・青年期の想起された養育者（両親，母親のみ，父親のみ）の養育態度及び児童期・青年期の仲間経験と自己肯定感との間の全てにおいて有意な正の相関関係が見られた。このことから，親および仲間が受容的な態度をとることは子どもの自己肯定感に関連があることが示唆された。

次に，自己肯定感及び時間的展望との相関関係を見ると，想起した養育者のどのような場合（両親，母親のみ，父親のみ）においても同様な結果が得られ，また自己肯定感は時間的展望尺度の全ての下位因子との間に有意な正の相関関係が見られたことから，青年期における自己肯定感と時間的展望との間に関連があるという示唆が得られた。

さらに時間的展望と精神的健康との相関関係を見ると，想起した養育者（両親，母親のみ）の時間的展望「過去受容」は精神的健康「うつ症傾向」との間に負の相関関係が見られ，時間的展望「充実感」「希望」は精神的健康「社会活動障害」との間に負の相関関係が見られたことから，青年期における時間的展望と精神的健康には関連があることの示唆が得られた。

以上より，想起した養育者（両親・母親のみ・父親のみ）の受容的な養育態度および仲間からの被受容感は自己肯定感や時間的展望を媒介し，精神的健康に影響を及ぼすという一連の関連の示唆が得られた。

Ⅱ．想起した養育者の養育態度及び仲間経験の自己肯定感及び時間的展望への影響が精神的健康（GHQ12）に至るプロセスについて

ここでは想起した養育者の対象者別の結果について考察していく。

想起した養育者（両親・母親のみ）の養育態度および仲間経験が自己肯定感及び時間的展望を媒介して精神的健康（GHQ12）に影響を与えるプロセスについては Figure1，Figure2 から以下のようにまとめられる。

（1）「想起した養育者（両親）の青年期のモニタリング的な養育態度」「児童期及び青年期の仲間からの被受容感」→「自己肯定感」→「希望」「充実感」→「社会活動障害」「うつ症傾向」について（Figure1）

青年期の想起した養育者（両親）の養育態度「モニタリング」および青年期の仲間経験「被受容感」が「自己肯定感」に正の影響を与え，それが時間的展望「希望」「充実感」に正の影響，また時間的展望「希望」が精神的健康（GHQ12）「社会活動障害」に負の影響を与え，時間的展望「充実感」が精神的健康（GHQ12）「うつ症傾向」に負の影響を与えることが示された。この一連の関連の結果から次のようなことが考えられる。本研究において，「モニタリング」は想起した養育者（両親）が子どもの普段の活動を知っており，その様子を口出しせずに見守

るというような態度である。青年期において両親から愛情表現をされるというような受容的な養育態度よりも，子どもの活動を見守るというような態度を受けることの方が自己肯定感を高められると推察できる。松下・吉田（2009）によると，人は，青年期に入ると，自分らしさを模索し始め，親から自立したり社会へ足を踏み出したりと，独立して生きていくように準備を始める。この時期に「自分とは何者なのか」という青年期の課題に直面し，それを青年らは自らで見つけだそうとしている。その際に，親からの直接的な愛情表現は心理的距離を取りづらくし，親からの自立につながりにくいのではないだろうか。そのため，青年期において子どもを見守るようなモニタリング的な態度が自己肯定感を高めることができると考えられる。

児童期および青年期の仲間からの被受容感が青年期の自己肯定感にプラスの影響を与えていることが示された。これに関連して，関・堀井（2019）は児童期における仲間からの受容感が自尊感情に正の影響を及ぼすことを示しており，岡田（2011）は現代青年の友人関係において受容感が高ければ，自尊感情にプラスの影響を及ぼすことを示している。また，学校生活が始まる児童期からは親との関わりの時間よりも仲間とのかかわりの時間の方が多くなることを考えると，学校生活で起きた嬉しいことや楽しいことの多くの誘因には仲間とのかかわりが影響を及ぼしていると考えられる。そこで，仲間から自分の価値を認められている，受け入れられていると認識できることで現在においても自分という存在を前向きに捉えられるのではないだろうか。以上のことから，仲間からの受容的なかかわり方は児童期・青年期一貫して重要といえるのではないだろうか。

親のモニタリングする態度や仲間からの受容によって，自分自身に対して前向きに考えられるようになり，自分の人生の明るい未来像にもつながることが示された。将来に希望を持てると，自分のやりたい職業などにあきらめることなく，挑戦できるのではないだろうか。また，本研究において用いられた「充実感」因子は現在の日常生活に満足し，充実しているかという内容である。つまり，親や仲間から受容された場合，自己肯定感をもつことができ，今の生活に対しても満足感を得られるのではないだろうか。

さらに，前向きな時間的展望が精神的健康「社会活動障害」「うつ症傾向」どちらにも影響を及ぼしている。このことから，子どもにとって両親の存在が社会活動障害を低下させ，うつ症傾向につながりにくいということが推察される。

（2）「想起した養育者（母親のみ）の青年期のモニタリング的な養育態度」「青年期の仲間からの被受容感」→「自己肯定感」→「希望」「充実感」→「社会活動障害」（Figure2）

青年期の想起した養育者（母親のみ）の養育態度「モニタリング」および青年期の仲間経験「被受容感」が「自己肯定感」に正の影響を与え，それが時間的展望「希望」「充実感」に正の影響を与え，またその時間的展望「希望」が精神的健康（GHQ12）「社会活動障害」に負の影響を与えることが示された。児童期の養育態度および仲間経験については自己肯定感に有意な影響を及ぼさず，青年期においては有意な結果が見られた。このことから，特に青年期に仲間から認められると感じられることが自己肯定感を高めることにつながると示唆される。落合・佐藤（1996）によると，青年期は心理的離乳の途上にあり，青年が頼りにする相手や心を打ち明ける相手が親ではなく，次第に友達に変化する。そのため，親からは見守ってもらえるようなモニタリング的な態度が，仲間からは受け入れられていると認識できることが現代青年にとって自分という存在に価値を持てる支えになると推察できる。また自己肯定感を抱けたことによって，現在や将来に対する肯定的な時間的展望をもつことができ，その影響で社会活動に対しても障害を感じることなく，行っていけるのではないだろうか。

Ⅲ．想起した養育者（父親のみ）の養育態度及び仲間経験→自己肯定感→時間的展望→精神的健康（GHQ12）について（重回帰分析結果）

Table2-2-4 より，児童期の父親の養育態度「受容的かかわり」において，「自己肯定感」に正の影響を与え，自己肯定感は時間的展望の「過去受容」に正の影響を与えることが示された。また，時間的展望「充実感」が精神的健康（GHQ12）「社会活動障害」に負の影響を与えることが示された。本研究において「過去受容」とは，自分の人生の過去の出来事を肯定的に捉えられているかという内容である。つまり，父親が子どもの行動や思いを受け入れるような態度の場合，自己肯定感を高められ，またそれ

が過去の出来事も肯定的に受け止めることにつながりやすいであろう。母親の養育態度の場合は，過去受容へのパスが見られなかったが，父親の養育態度の場合に，過去受容への正の影響が見られたことから，母親と父親では子どもの時間的展望に異なった影響を及ぼすと考えられる。共働き世帯が増えている現在でも，子育ての多くを母親が担っているという現状がある（篠原・原崎,2004）。そのため，母親から認められたりしつけられたりという経験は日常の中でよくあることなのであろう。これを読み取ると，父親から認められるという経験は母親よりも少ないと予測され，父親が子どもの行った行為に対して受容的に接すると，その過去の出来事を思い出したときに，よりプラスに感じられることが多いのであろう。

以上の想起した養育者別に検討した本研究全体の結果より，親の受容的な養育態度および仲間からの被受容感が自己肯定感を高め，またそれが時間的展望に肯定的な影響を及ぼしており，さらに，その時間的展望が精神的健康（GHQ12）を高めることが示された。また，父親，母親の養育態度によって時間的展望に及ぼす影響が異なることも知見された。

全体的考察

本研究の全体的な目的は，親つまり養育者の養育態度および仲間経験が自己肯定感や時間的展望を媒介して，精神的健康（GHQ12）に及ぼすプロセスについて検討することである。その結果についての考察を行う。

Figure1,2 からわかるように，主な養育者として両親・母親のみを想起した場合，青年期のモニタリング的な養育態度が自己肯定感を高め，またそれが時間的展望に肯定的な影響を与えることが示された。そして，その時間的展望が精神的健康（GHQ12）に肯定的な影響を与えることが示された。一方で，重回帰分析の結果（table2-2-4,table2-2-5）から父親のみを想起した場合，青年期においては有意な結果は得られず，児童期の受容的な養育態度が自己肯定感を高め，またそれが時間的展望に肯定的な影響を与えることが示唆された。これらの結果より，想起した養育者が両親の場合は，自己肯定感，時間的展望を介して精神的健康に肯定的な影響を与えていたことから，母親のみを想起した場合よりも青年期においての精神的健康に与える影響がより大きいということがいえるであろう。以上より，青年期の子どものうつ症の低減のためには，両親の存在が重要であるといえよう。親や仲間から受容されることで，高い自己肯定感を現代青年がもつことができれば，自分自身を前向きに捉えることができ，それにより自分の将来においても希望を持って，目標に向かって挑戦することができると考えられる。さらに，自己肯定感によって日常生活に満足感を得られ，それによりうつにつながりにくいことが考えられる。

両親どちらともからの養育態度が自己肯定感にとって大切であるが，児童期においては父親の受容的な養育態度が，青年期においては母親の受容的な養育態度が自己肯定感を高めるためには必要であることが本調査の結果からいえるのではないだろうか。Harris et al.（1998）は父親からの愛情を多く受けて育った子どもは成人後の自尊心が高く，人生に対する満足感も高いということを示している。一方で，田中（1993）は青年期後期をむかえた女子を対象とした検討から，父－娘関係よりも母－娘関係の方が彼女らの自我の発達にはるかに強い影響を及ぼしていることを示している。これらから，児童期においては父親から，青年期においては母親から自分のことを理解され，自分のことを何よりも大切にしてくれていると感じられることで，現在の自己肯定感を高められると推察される。両親の受容的態度はもちろんのこと，児童期においては父親の子どもとのかかわり方が，青年期においては母親のかかわり方が青年期の子どもにとって肯定的な自己概念や精神的健康において重要なものとなると考えられる。

本研究の結果から，「児童期青年期いずれにおいても親の受容的な養育態度および仲間からの被受容感が高い場合，それらが自己肯定感を高め，それにより肯定的な時間的展望を持つことができ，その影響で精神的健康の促進にもつながりやすいであろう。」ということが予想されたが，青年期においてのみ有意な結果が得られたことから，本調査での仮説は部分的に支持されたといえよう。

今後の課題

本研究での仮説を検討するにあたり，児童期から青年期にわたって一貫した親の受容的な養育態度が自己肯定感に有意な影響を与えることが予想され，親の養育態度について児童期青年期というように連

続した視点からの親の養育態度の子どもへの影響について検討を行った。その結果，想起された養育者（両親・母親のみ）において青年期のモニタリング的な親の養育態度が自己肯定感に有意な影響を与えることが示されたが，児童期青年期という連続的な視点からの親の受容的な養育態度は自己肯定感に有意な結果が得られなかった。これらの関連をより明らかにするためには，親の養育態度についてのさらなる検討や縦断的な研究が必要だと考えられる。

また本研究では，父母両方・母親のみ・父親のみ・その他というように主な養育者として誰を認知したかによる，その対象者別による検討を行った。しかし，父親のみを想起する回答者数が少なかったことから，共分散構造分析による検討を行うことが出来なかった。研究の積み重ねによって新たな結果を明らかにすることができるかもしれない。これらのことを解決することが今後の課題である。

文献

粟谷初子・本間友巳（2009）：思春期の自己肯定感のあり方に影響を及ぼす要因について－学校生活適応感，生活習慣との関係を中心に－　京都教育大学教育実践研究紀要　第10号　p193-202

内閣府『令和元年版子ども・若者白書』（2019）：〈https://www8.cao.go.jp/youth/whitepa per/r01gaiyou/index.html〉（令3.2.2 最終　アクセス）

内閣府『平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』（2014）：〈https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index. Html〉（令3.2.2 最終アクセス）

白井利明（1994）：時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究　第65巻　第1号　p54-60

岡村仁（2011）：うつ病のメカニズム　バイオメカニズム学会誌　第35巻　第1号　p3-8

日潟淳子・斎藤誠一（2007）：青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連　発達心理学研究　第18巻　第2号　p109-119

尾坂泰佳（2019）：安定した居場所が自己肯定感に与える影響　令和元年度宇都宮大学卒業論文

郭芳・田中弘美・任セア・史 邁（2018）：子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する実証研究：京都子ども調査をもとに　評論・社会科学　第126号　p15-32

海老沼李奈（2017）：思春期における親子間コミュニケーションと子どもの自己肯定感との関連－食事場面に着目して－　作新学院大学臨床心理センター研究紀要　第11号　p61-62

白川由梨（2011）：学校環境，親子関係が子どもの自己否定感に与える影響－学力階層との関係に着目して－　研究所報　第1巻　p40-50

石丸加奈子・荒木紀幸（2005）：学校生活における自尊感情と学校内不安に関する研究：兵庫県公立K小学校児童について日本教育心理学会総会発表論文集　p223

河越麻佑・岡田みゆき（2015）：大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因　日本家政学会誌　第66巻　第5号　p222-233

山本美夏・上手由香（2017）：親の養育態度が大学生の評価懸念及び適応感に及ぼす影響の検討　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要　第16巻　p89-103

姜信善・酒井えりか（2006）：子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての検討　富山大学人間発達科学部紀要　第1巻　第1号　p111-119

外山美樹・伊藤正哉（2001）：児童における社会的比較の様態（2）―パーソナリティ要因の影響―　筑波大学発達臨床心理学研究　13　p53-61

松下姫歌・吉田愛（2009）：大学生における友人関係と自我同一性との関連　広島大学心理学研究　第9号　p207-216

篠原弘章・福山久子（1987）：両親の養育態度が児童の達成動機と学習意欲および学校不安に及ぼす影響について　熊本大学教育学部紀要，人文科学　第36号　p257-273

金子劭榮・新瀬和夫（2002）：小学生の向社会性と親の養育態度　金沢大学教育学部紀要（教育科学編）第51巻　p145-158

篠原しのぶ・原崎聖子（2004）：青年の甘えの背景に関する調査研究．福岡女学院大学大学院紀要1　p9-20.

永井暁子（2010）：父親の子育てによる子どもへの影響　家計経済研究　第86号　p45-52

Kathleen Mullan Harris, Frank F. Furstenberg, Jr., and Jeremy K. Marmer（1998）：Paternal Involvement with Adolescents in Intact Families: The Influence of Fathers over the Life Course,

Demography, 35: p201-216.
田中正（1993）：親子関係と自我の確立－青年期後期の女子を対象として－　名古屋文理短期大学紀要　第18号　p7-14
西岡敦子（2011）：子どもの認知による子どもに対する親のリーダーシップ行動測定尺度の作成　国際研究論叢　p119-128
内海緒香（2013）：青年期養育尺度（PAS）の作成　心理学研究　第84巻　第3号　p238-246
平石賢二（1990）．青年期における自己意識の発達に関する研究（Ⅰ）－自己肯定性次元と自己安定性次元の検討－　名古屋大學教育學部紀要　第37巻　p217-234
厚生労働省「ひとり親家庭等の現状について」（平27.4.20）〈https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyou kintoujidoukateikyoku/0000083324.pdf〉（令3.2.2 最終アクセス）
杉山崇・坂本真士（2006）：抑うつと対人関係要因の研究：被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討　健康心理学研究　第19巻第2号　p1-10
田中道弘（2005）．大学生のインターネット利用と精神的健康に関する研究　埼玉学園大学紀要　人間学部篇　第5巻　p173-181
中川泰彬・大坊郁夫（1985）：日本語版GHQ精神健康調査票手引　日本文化科学社
落合良行・佐藤有耕（1996）：青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究　第44巻　第1号　p55-65
関真伍・堀井俊章（2019）：児童期における友人からの受容と自尊感情の関連　横浜国立大学教育学部紀要，Ⅰ，教育科学　第2巻　p136-151
岡田努（2011）：現代青年の友人関係と自尊感情の関連について　パーソナリティ研究　第20巻第1号　p11-20
國枝幹子・古橋啓介（2006）：児童期における友人関係の発達，福岡県立大学人間社会学部紀要　第15巻　第1号　p105-118

謝辞

本研究を実施するにあたり，質問紙調査に快くご了承くださいました先生方より，多大なるご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。また，質問紙調査にご協力くださいました学生の皆様に，心より感謝申し上げます。

（2021年10月20日受付）